
二人に分かれた長門有希

初心者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人に分かれた長門有希

【Nコード】

N1362W

【作者名】

初心者

【あらすじ】

キャラ崩壊しているはずなので過度な期待はしないでください。

<http://twitter.jp/user/OTEARAI/follow>

で更新ツイートもしています。

第1話

俺は今部室の前にいる、もちろんノックをして入るつもりだ。

なぜなら朝比奈さんのお着替え中に入るなどと嬉しいハプニングを見ないようにしているからだ。

見ようものならハルヒが延々と語り出し朝比奈さんは悲鳴を上げるなど俺に困った状況を与えてしまうからだ。

まあそこいらの思春期男子たちはたとえハルヒに言われてもあの朝比奈さんの着替えを優先するだろうが俺はちゃんと自重するのだ。

まあ長話は置いてドアを叩くでしょう。

コンコン

ドアが当たり前な音を出す。

「どうぞ」

中から返事をする。

ああ長門がいるんだと確信して中には朝比奈さんはいないとも確信できた。

ガチャッ

そつえば長門が「どうぞ」なんて言ったことがあったっけ？

そんな疑問を解決するために部室に入る俺こと別名キヨンは部室にいる人物を見た。

長門有希

超万能な宇宙人端末、情報統合思念体によってつくられたコンタクト用……まあそんな細かいことはいい。

「長門……」

部室の右側の窓の近くにいすを置いてそこで本を観ている。

それだけならまだいい問題はこっちだ。

部室の左側の窓の近くにいすを置いてそこで小さくなっている人物だ。

その人物は眼鏡をかけていて反対側に座っている人物をかなり警戒している。

そして俺を観るなりさらに小さくなっていた。

これはいったいなにが起きたんだ？

「長門説明してくれ」

俺が尋ねると右側に座っていた長門が語り出した。

ようするにだ、ハルヒのせいらしい。

俺は何か言わなければならないと思い左側にいる長門に近づく。

「えっとだな・・・俺を知ってるか？」

いつぞやの長門に質問したような単語がでてきた。

長門は小さな声で「知っている」とだけ言った。

「俺もおまえのことを多少知っているんだ、図書館のときだよな？」

長門は俺を見つめる。

「うん」

小さな声で長門は言う。

どうやらあのときの長門がこちらの世界に来たような気分だった。

断言するどちらも本物だ。

どちらも俺が知っている長門有希だからだ。

どうしたものか・・・また一波乱か。

とりあえずだますは長門に聞く必要がある。

「長門一人暮らしだよな？」

「「そう」「

本人同士なので返事も同じ双子かおまえ等は。

「これからどうするんだ？」

「問題ない二人で使えばいい」

簡単でなによりっていいのかそれで？

「えっ？」

片方の長門は混乱しているようだ。

当然だろう自分のそっくりさんがまさか自分の部屋に入るんだからな。

「長門ここはなに部だ？」

「SOS団」

「文芸部」

あちゃーやっちまった。

確かにどちらの長門も本を観ているから文芸部だと思っても不思議じゃない。

バンッ

部室の扉が力強くあけられた。

ついに現れた我らが団長涼宮ハルヒ、あらゆる問題の中心人物あのときの長門を狂わせた張本人。

「有希あなた双子がいたのね」

「そう双子」

長門が言つと左の長門がさらに混乱する。

「まあ団員の家族なら歓迎よ名前は？」

長門は恥ずかしそうな顔をして小さく言った。

「長門有希」

「へえ名前も同じなの？さすが双子ね」

右にいる長門が俺を見つめる。

わかってるさ、あとでだろ。

長門は俺のアイコンタクトを理解して本に視線を戻した。

第2話

時間は少し流れ俺は長門のマンションへやってきた。

二人の長門がお茶をいれるものを取り合っていたのを笑いをこらえてみていたがどうやら眼鏡無しのほうに軍配があがったようだ。

長門がお茶を用意している間俺ともう一人の長門と二人きりとなった。

とりあえずだこの長門はこの長門だろうと探りを入れてみる。

「えーと、入部届けってどうした？」

長門の顔に涙が浮かんでいた。

ああハルヒがいなくなったときのか……。

つまりだこの長門は俺がエンターキーを押すまでいたあの長門だ。

エラーが発生した長門が作った世界。

たった一人の文芸部員で本好きの内気な少女で今の長門より感情が豊かな長門。

「あのあと部員は増えたのか？」

「えっ？あなたがおかしくなってから私はもう一人の私のそばにいた」

なんということだあの世界は俺がエンターキーを押してから止まっているみたいだ。

長門がお茶を持ってきた。

お茶を三人分いれて置く。

とりあえず一杯ああ

「おいしい？」

「ああ」

「私と似ている」

もう一人の長門も不思議がっている。

「私はあなた、あなたは私」

もう一人の長門は首を傾げている。

わかってるさこっちの長門はそんなに簡単にいえないのは知っていたさ。

「まあなんだ、長門、おまえは長門有希、こっちも長門有希ってことだ」

我ながら下手な説明だと思ったが眼鏡の長門は「そう」と言ってくれた。理解したのだろうか？

さて今はどうでもいい今は長門の説明を聴こう。

「涼宮ハルヒの発言がトリガーとなって今回のことが起きたと考えられる」

思い当たる節が多すぎるぜ。

ハルヒはときどき長門がなにを考えているのかわからないと言っていた。

つまりだ長門が感情豊かになって欲しいとかわかりやすいようにしたいとか望んだらしい。

しかし困ったことになった。

もう一人の長門と再会していつかはまたさよならしなければならないそのときまた俺は長門を泣かせてしまう。

あれはつらい。

どうしたものか。

「どうすればいい？」

「私の力でこの娘を消す」

うん、断固反対だ。

「私が感情豊かになる」

うん、無理だ。

もう一人の長門だって時間をかけなければならぬのにこちらの長門がおいそれと感情豊かになるわけがない……見てみたいが。

別れるときまでいることにしよう。

もう一人の長門はうなずいた。

さて最初の用件は終わった。

次は呼び方だ。

「長門」

俺が呼ぶと二人が俺を見る。

やはり区別する必要があるな。

「えーとだ、俺は混乱しないように呼び方を変えようと思う。そこで長門有希を分けて長門と有希にする」

長門がしゃべりだす。

「私が有希であの娘は長門すべき」

それにもう一人の長門が反論する。

「有希は私……」

小さくなりながらも意見を言うもつ一人の長門。

ここにハルヒがいたら萌えとか言うんだろうがな。

「「あなたが決めて」」

結局俺が決めるのか？

失敗だった少し恥ずかしい。

有希有希有希有希やべえ恥ずかしい。

ハルヒなら普通に言えるのにな、なぜか長門には恥ずかしいぞ。

ここは………

「二人で話し合え」

逃げだ完全に逃げだ。

俺はぬるくなつたお茶を飲み干し長門の家を後にした。

後はまかせた。

一波乱がまた始まるんだな。

俺はそう予感した。

第3話（前書き）

ツイッターでも更新情報を流してます
r.jp/user/OTEARAI/follow
http://twt

第3話

俺はめずらしく朝早くに高校へやってきた。

だが教室には行かずまっすぐSOS団の部室にやってきた。

案の定、部室には二人の長門がいた。

「結論からいう私が有希」

と眼鏡無し。

「わっ私が長門……」

と眼鏡あり。

「わかった」

そういえばわからないことがもう一つ。

「有希」

有希がなぜか俺を見返す。

そこにはなにかうれしさを感じた。

「なに？」

「長門はどこのクラスだ？」

そう長門のクラスだ。

「彼女は私だからどちらかが行けばいい」

ああなるほど二人って便利だなあ。

「便利ではないこの世界の私と同じように振る舞わなければなら
ないから」

そっが大変なんだな。

「長門、とりあえずはこの部室にいてくれ」

長門は小さくうなずいた。

ちよくちよく顔を出してやれば寂しくないだろう。

さーて次はハルヒか。

ハルヒが望んで出てきた長門をハルヒはどう思っているのだろう。

「ハルヒ」

「なによキョン」

「昨日のことなんだが・・・」

「あの娘もSOS団に入れるわ」

おいおい、いきなり団員にしゃがったぞこの団長は。

まあ俺もそのつもりだったから勧誘しようって誘おうとしたわけだが取り越し苦労だったな。

「あの娘有希の家族なんでしょ？これなら資格があるじゃない」

まあ宇宙人の有希に地球人の長門だからなネタにしては完璧すぎるな。

「と言うわけであなたもSOS団の一員よ」

パチパチパチ

とりあえず団員全員から拍手をもらった長門は断るはずもなく入団した。

でそのお祝いと言うわけで喫茶店にいるのだが。

まあ同じ長門有希だもんな。

食べる食べる二人の長門有希は出されたものを次々に食べていく。

俺たちはそれを啞然と見ていたがハルヒの一言で俺は驚愕する。

「今日はキヨンのおごりね」

そりゃないぜ。

で解散した。

とりあえず明日谷口にデコピンすることにする。

いつかの長門有希の評価を改めるためにな。

とりあえず寝る。

第4話（前書き）

おもしろいのか疑問を持っている作者です
http://t
wtr.jp/user/OTEARAI/follow

第4話

毎朝恒例のハルヒとの雑談を終わらせ教師の念仏をどうにか頭にたたき込んでようやく昼休みだ。

俺は弁当を持って部室に行こうと立ち上がったときだった。

「キョーン女子がおまえにようがあるらしいぞ」

と教室全体に言われて声の主の方を向くと声の主と長門がいた。

長門は頬を染めて下を向いていた。

俺は弁当を持って冷やかすクラスメートをやりすごし長門の元へ向かう。

「どうしたんだ？」

聞いたが長門の返答を待つ前に俺は長門の手に弁当があつたのを見逃さなかった。

なるほど、お昼を一緒にか？

俺は長門が言う前に答えた。

長門は顔を上げて小さく頷いた。

とりあえず移動を始めないと野次馬が集まりそうだ。

「いくか」

俺と長門は並んで歩き出した。

途中でハルヒと出会わなかったので安心した。

場所はいつもの部室だ。

部室には先客がいた。

「有希」

有希は俺たちをみた。

有希も弁当を持ってきていた。

とりあえず団員席に座り弁当を広げる。

長門は俺の向かいに座り広げる。

有希は最初からいたので長門の隣を使っていた。

それにしても静かな昼食だな。

元々長門も有希もあまりしゃべるタイプではないはずだ。

俺はこっそり長門のお昼をのぞく。

「サンドイッチか」

いきなり聞かれたのか長門は小さくふるえていた。

わかりやすい

「つくった」

「私と一緒に」

長門の後に有希が言う。

「たくさんあるな」

長門有希の胃袋が少し心配だが気にしないことにしよう。

すると俺の目の前にサンドイッチがでてきた。

「どうぞ」

長門がサンドイッチをくれた。

「あっああ」

俺も弁当を見て我が母が作った唐揚げを差し出す。

「サンドイッチの礼だ」

長門は唐揚げを受け取ると口に入れた。

「おいしい」

長門が少し表情をゆるめていた。

「私にも」

有希が俺に言ってきた。

有希がおねだりとはあまり記憶にない。

俺は有希に唐揚げを差し出す。

「ありがとう」

有希の返事に悪い気はしなかった。

有希は唐揚げを口にいれて動かす。

「庶民的な味」

褒め言葉だろうか？

ただ有希が少しずつ変わってきていることに俺は嬉しい。

いつか有希も長門のような表情をしてくれるだろうか？

長門も明るくなるだろうか？

おっとそろそろ昼休みが終わるな。

俺は平らげた弁当を片づけて二人より先に部室を後にした。

教室に戻るとハルヒが妙に機嫌が悪かった。

どうしたんだ？腹こわしたか？

「あんたお昼どこにいたのよ」

「部室だ」

「あら意外にまじめじゃない、いつもまじめならいいのに」
そうかい。

「ねえキョン明日なんだけど」

どうした？

「私とお昼を食べない」

ハルヒとお昼かたまにわいいだろう。

「いいぜ、明日な」

ハルヒは明るくなった。

古泉はハルヒが機嫌がいいのを喜んでいた。

「閉鎖空間が発生しないだけ嬉しいですよ」
と言っていた。

ハルヒの弁当を摘んでも大丈夫だろうと俺はニヤついていた。

第5話（前書き）

キャラ崩壊してるよね？それも覚悟の上さ [http://t
w
i
t
t
e
r
.
j
p
/
u
s
e
r
/
O
T
E
A
R
A
I
/
f
o
l
l
o
w](http://twitter.jp/user/OTEARAI/follow)

第5話

ハルヒとの昼食イベントをこなしあつというまに休日となった。

今日はSOS団恒例の不思議探索の日だ。

ハルヒがいつものようにくじ引きでパートナーを選ぶ。

今回から長門が加わっているので3対3となるわけだが……。

結局、俺と有希と長門となった。

「ちゃんと見つけてきなさい」

ハルヒのわがままを聞き流し俺たちは出発した。

「どこにいききたい？」

ふと二人に尋ねたのだが二人とも行き先は同じようだ。

結論、図書館だ。

「それじゃあハルヒに呼ばれるまではこの中で自由にしようぜ」

二人はフラフラと歩きだした。

さすがに宇宙人とふつうの人間だと読む本のジャンルは違うようだ。

俺は適当なマンガをチョイスしておく。

p r r r r !

うわっ

明らかに周りに迷惑な声を出してしまった。

着信だ。

「いったん集合」

不機嫌なハルヒの声をどうにか聞き流し眠たい頭をフル回転にして有希と長門を連れだし集合した。

「遅い」

戻ってきて早々チーム入れ替えだ。

まあなんだこんな組み合わせとなってしまうた。

俺は朝比奈さんと長門だ。

朝比奈さんのコースはやはりこのコースだ。

なんだこれは・・・なにかのイベントか？

俺の左右には朝比奈さんと長門が歩いている。

どこかに座りませんか？

「そっそつですね」

「うん」

朝比奈さんと長門は俺の提案を了承した。

とりあえずベンチに座ろう。

さて俺は朝比奈さんと長門に挟まれて座っているのだが悪い気はしない。

そついえば有希も長門も制服じゃなかったな。

いつ以来だろうか私服の有希と長門、いや長門は初めてか。

「キョンくん、未来からはなにも来てません」

そうですか。

さすがの朝比奈さん大もこの事態にはお手上げなのか？

「長門さん」

「なに？」

二人はお互いにビクビクしていた。

「長門さんは好きな人はいるんですか？」

いきなりなにを言い出すんだこの未来人は、長門も考えるな。

一瞬長門が俺を見たような気がした。

「いない」

なぜかホッとした。

「できたら教えてくださいね」

「うん」

会話はそこで終わった。

さーてハルヒが戻る前に集合場所に帰りますか。

いち早く到着した俺たちだが後から着たハルヒの文句を聞いて解散した。

まったくこの団長は。

「キョンくん今日は楽しかったよまた学校でね」

はい朝比奈さん。

長門が近くにいた。

「……………あつまた図書館に……………一緒に……………」

ああ約束だ。

長門の意思表示も新鮮味があつてたまらない。

「それじゃあ」

有希と長門は行ってしまった。

俺も帰るか。

「なんですとお!？」

自転車が駐禁で持つて行かれていた。

はあやれやれだ。

第6話（前書き）

なんとなくできた

http://twitter.jp/user/OTEARAI
/follow

こっち私のホームページ

http://hp.did.ne.jp/otearai/?
guid=ON&my=1

第6話

不思議探索から数日後俺は長門に呼び出された。

「明日、家に来て」

長門は小さな声で俺に言った。

別に断る理由もないのでOKした。

まあ有希もいるだろうし大丈夫だろう。

SOS団の活動を終わらせ帰宅する。

明日は土曜日か。

そんなことを考えながら俺は夢の中へ意識をまわした。

.....

俺は今かなり急いでいた。

何を隠そう俺は寝坊したのだ。

すまん長門もう少し待っててくれよ。

例のごとく長門のマンションへきてボタンを押す。

「遅れてすまん長門、俺だ」

防犯扉が開き俺はエレベーターに乗り込み上に上がる。

遅刻した俺を長門は責めることはなくそれどころか来てくれたことに喜んでいたようだった。

それより俺には気がかりなことがあった。

有希がない？

しかも長門は部屋着を着ていた。

いつもの見慣れた制服ではなく紛れもなく服だ。

健全な男子高校生と内気な読書女子高生。

なんだこれは？

長門……がんばったんだな。

俺は成長した子供をみる親の目で長門をみた。

まあ子供はいないが妹はいるぞ、うん。

長門と俺はいつぞやの位置で座っている。

それにしても長門、目のやり場にこまるぞ。

長門は正座をしていたが制服の時と同じような短いスカートは反則だ。

「・・・・・・似合ってる？」

俺の視線を感じたのか長門が訪ねてきた。

「ああ可愛いぞこれで眼鏡がなかったら最高だ」

これは本心だ、だが眼鏡がなくなると区別が付きにくくなりそうだ。

「お茶煎れてくる」

長門が立ち上がるとき一瞬だけ長門の脚を見てしまった。

ちょっとドキッとしてしまう。

長門が歩くたびにヒラヒラと動くスカートを観察していると不意に見えてしまうものもあるわけ。

まあなんだ女の子らしかったと感想を付けておこう。

お茶がでてきてゆっくりと味わう。

あー暖まる。

朝比奈さんと良い勝負するのではないだろうか？

「そつえば俺を呼んだ理由って？」

呼ばれたからには訪ねたくなることだ。

「……………」

長門は頬を赤くして下を向いてしまった。

「一度でいいからデートしてみたくて」

小さな声で長門が告げる。

ああなるほどインドア派のデートね……………。

「デート？俺と？」

長門が小さくうなずく。

これはポイントが高いぞ。

まあさすがの長門もその服装で外には出たくないらしい。

俺もこの姿の長門を誰にも見せたくない。

ん？なぜだろう？まあいいや。

「長門、着替えろ」

突然の俺の発言に長門は顔を上げた。

「えっ？」

デートはインドアだと成立しないぜ。

長門が着替えるために立ち上がり部屋に入っていた。

しばらくするとスカートだけを穿き替えてきた。

スカートは先ほどより長い、だが似合っていた。

「よしっいくか」

俺と長門は玄関から出て長門が鍵をかけたのを確認した。

長門の手を掴む。

長門の頬がまた赤くなる。

「まあデートならな」

俺と長門は手をつないでマンションから出ていった。

第7話（前書き）

文字数が異常に少ない

第7話

俺と長門は賑やかな公園へやってきた。

「なにかのむか？」

長門は首を横に振った。

とりあえずベンチに腰掛けおそらく妹と同じ年の人達が遊んでいるのをながめていた。

長門の顔は満更でもなさげだ。

するとひとりの子がおれたちを見ていた。

「こらっそんなに見ちゃいけません」

その子の親らしき女性が注意していた。

「ごめんなさいね、せつかくのデートを邪魔して」

どうやら恋人同士だと思われるらしい。

「いえいえお気になさらずに」

二人が去って長門を見る

「俺たち恋人同士みたいって思われているみたいだな」

長門はしばらく黙っていた。

「移動するか？」

長門は小さく頷いた。

その後俺たちは行き先に困り果て図書館に逃げ込んだのは言っまでもない。

第8話（前書き）

今まで使っていたタイトルが消失のキャッチコピーと判明したので急遽変更しました。

第8話

日曜日、俺は何かをするわけもなく部屋のベッドで寝ころんでいたが少し外を歩きたくなってきた。

「出かけてくる」

妹の連れてけコールを聞き流しそそくさと家をでた。

あーまさか妹はいつかハルヒみたいになるのではないかと懸念してしまうな。

「おっ！」

見覚えのある後ろ姿があった。

「おーい」

俺は走って近づく。

振り返る人物それは……。

「有希じゃないかどうしたんだこんなところで」

「なにもない」

有希の表情は確かに誰かにあうために来たようにしか見えなかった。

「一緒に歩いていいか？」

俺が聞くと有希は小さくうなずいた。その表情はなんだか嬉しそうに見えた。

道を歩く俺と有希、そういえばまともに有希と歩いたのはいつ以来だろう？

「ここ入ってみないか？」

ファミレスだそろそろお昼だからな。

「奢ってやるよ好きなものを食べていいぞ」

有希はカレーライスを3杯食べた。

「ごちそうさま」

ファミレスを出て俺と有希は昨日長門と来た図書館に入った。

そこで数時間過ごし俺は有希のマンションにやってきた。

有希に案内されて入ると長門がいた。

「おっおかえりなさい……あつ」

長門は有希に言った後俺に気づいて顔を下に向けた。

「よっ長門」

長門は下を向いたままだった。

「伝えたいことがある」

有希は唐突に言った。

とりあえずいつものテーブルに長門と有希と向かい合った。

「涼宮ハルヒの力に変化が起きた」

なんだって？

「このままだと私たち二人のうちどちらかが消える」

有希はいつものように告げた。

第9話

なんだって？消える？なにを言っているんだ有希？

「涼宮ハルヒの効力が消えてきている。涼宮ハルヒにとって不用な
ほうが消える」

俺は呆然と有希の話を聞いていた。

「何か、何か方法は無いのか？第一どちらかが消えたら怪しまれる
だろ？」

「涼宮ハルヒはどちらかが消えても何も思わない。忘れてしまっ
たら」

なんてこった、張本人が都合よく忘れるなんて世の中不公平すぎる
ぜ。

長門と有希の顔はよく似ている。どちらも本人だから、しかし表情
は長門は悲しい顔をしていて有希は無表情だ。

しかし俺にはわかる有希は消えたくない。

「何か方法は無いのか？」

「一つだけある」

教えてくれ有希……。

「効力が消える前に涼宮ハルヒと接触して二人の存在をこの世界に固定させればいい」

つまりだハルヒを説得して長門と有希を消さないように頼めばいいハルヒに自分の能力に気づかせることもなくだ。

簡単そうだ。

「失敗すればどちらかが消えるか最悪両方消えることになる」

俺としてはどちらも消えて欲しくない。

「わかった、あと効力が消えるのはいつだ？」

「一週間後の0時0分0秒に効力が消える」

「一週間！？ たったそれだけか？」

「とりあえずだ二人とも毎日部屋に顔を出してくれまずはそこからだ」

こうして俺は長門と有希のために一週間奮闘することとなった。

第10話

衝撃の事実が発覚して、俺は長門と有希を消さないためにハルヒを説得しないといけないわけだが……

「ちょっと聞いているのキョン？」

聞いてるとも、まあ右から左に流れてはいるがな。

「まあいいわ」

いいんなら別に言わなくてもよかったような気がするがそこは言わないで置こう。まずはさわり程度に

「長門とはどうなんだ？」

「なにがよ？」

うかつだったハルヒと有希と話すところなんてあまり見たことがない。

「有希はねやつぱり無口キャラなのよ」

なにを言い出すんだこの団長は。

「みくるちゃんみたいに表情豊かにならなくちゃ」

朝比奈さんを張り合いにだすな。

「とにかく有希には明るくなってもらわなくちゃ」

いやいや有希は少しずつ変わってきていたんだそれを気がつかずに二人にしてそれでさよならはないだろ。

「ハルヒ、二人いたほうがいいだろ？」

これで駄目なら手詰まりだ。

「わかんない」

ハルヒはそれだけを言って黙ってしまった。

放課後俺は有希に呼ばれマンションに向かう。

「涼宮ハルヒが両方の存在を否定し始めた」

なっなんだと？

「事態は最悪に向かっている」

二人が消えるのか？

「そう」

一体なにが起きた？

「涼宮ハルヒに対して曖昧なことを告げた結果だと思われる」

すまん、俺はそれしか言えなかった。

第11話

有希のマンションからどうやって家についたのか全く覚えていない。
今の俺には長門と有希のことしか考えていなかった。

どうすればいい？

いつぞやのハルヒと閉じこめられた閉鎖空間でパソコン越しに有希に訪ねた内容だった。

しかし、俺程度の頭ではやはりわからないことだらけだ。

有希・・・長門・・・。

起死回生のアイデアが思いつかない。

結局、一睡もできずに朝になってしまった。

学校へ向かい朝比奈さんに助けを求めた。

禁則事項です。

朝比奈さんはそれだけしか言わなかった。

古泉、静観するしかない。

ただそれだけ・・・なんだ未来人も超能力者もなんも役にも立たない。

いつも助けてくれた有希・・・俺は・・・無力だ。

なにもできないまま最終日前日になってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1362w/>

二人に分かれた長門有希

2011年12月31日22時54分発行